

都市の音楽芸能をフィールドワークする～香港音楽紀行

A Field Study on the Performing Arts in Hong Kong (from traditional to popular music)

増 山 賢 治

MASUYAMA Kenji

這篇小文是根據筆者最近訪問香港期間（從 2013 年 1 月 12 號至 20 號）所了解到的有關音樂和各種表演藝術的情況而寫的。實際上，就是相當於根據筆者赴台北（同年 1 月 4 號至 11 號）所接觸到的音樂表演的印象而寫的一篇報告的後篇。筆者是從 1977 年 2 月 14 號以後的大約一個星期的期間，為了收集中國音樂的各種資料，首次訪港，從那以後，獲得幾次機會赴港學習和研究中國音樂，然後一直繼續留意該地音樂和表演藝術情況的變化。所以，可以說筆者對香港的認識，自然會比台北熟識的。

在日本，至於香港的音樂和各種表演藝術的報道，從過去到現在，無論普及性或學術性，活躍在各種媒體上執筆評論的，幾乎毫無例外的都是業餘愛好者。與此同時，民族音樂學者和流行音樂研究者也採取那種業餘性的文字資料。筆者認為：在那樣惡劣的情況下，正視香港的音樂文化的觀點，想要深入研究的方向就難以得到的。因此，為了改變日本人對香港音樂文化的負有偏向性或狹小性的看法，筆者親自赴港，根據自己的觀點和做法，對該地的音樂表演的最新動向，進行了實地調查。這次筆者在香港時，巡迴到了大會堂，藝術中心，香港文化中心等主要的音樂廳和各種表演場地，得到了音樂表演的很多信息，還欣賞到京劇，粵劇，民樂和街道現場表演等廣泛的音樂節目。通過那些見聞，筆者感覺到香港歸還中國以後，中國大陸的影響就涉及到香港社會的所有的方面（包括文化），香港人對這個情況，如何適應，融合還是排斥，自己認同等的各種反應，都會表現在音樂表演的。結果，日本的媒體和音樂研究的行業人士對香港音樂文化的低等認識，給筆者帶來了更加的不滿和懷疑。

はじめに

本稿は、筆者が直近の香港滞在の際（2013 年 1 月 12 日～20 日）に見聞した現地の音楽芸能に関する諸事情をまとめたもので、それに先立つ同年 1 月 4 日～1 月 11 日に訪問した台北の音楽芸能事情に関する論述^{注1}の続編である。筆者は、中国音楽の資料収集を目的として 1977 年 2 月 14

日から一週間ほど同地を初めて訪問して以来、1978年8月～1982年3月に中国音楽研究を遂行するために長期滞在^{注2}し、その後も何度か同地に赴く機会があり、前回の訪問は1996年7月30日～8月2日であった。今回の香港の音楽芸能事情調査の目的を、台北編で記した調査目的を元書き換えて簡約すれば、「都市の音楽芸能をフィールドワークするという主旨の下、香港には現在どのような音楽芸能の上演スポットがあり、何が提供されているかを幅広い音楽ジャンルに渡って観察し、漢民族の音楽文化が香港にどのように展開され、開花しているか、そしてそれは大陸や台湾（台北）とは如何なる共通点および相違点が見出されるか、それらの音楽文化の伝播と変容および相互作用、そしてそれぞれの特徴を考える上での某かの端緒を見出そうとするもの」となる。そして続編としての本稿の性格上、そこに台北編の結論の一部を反映させて、日本における香港の音楽受容の歪曲性、その報道および研究の狭小性、偏向性を出来得る範囲で明確化したいと考えた。実際、香港に対しては、台北に比してその変化を比較的周密に見てきたという点で、両都市に対する筆者自身の熟知度には明らかな差異があり、その意味では都市の音楽文化に対する視点、調査手法、記述内容の構成が台北編と大筋では同じでも、本稿はより広く、深く踏み込んだ観察を行うことができたと言えるかも知れない。

1 音楽芸能上演・情報収集スポット見聞録

香港の各種の音楽芸能の上演情報は今日では当然、インターネットを活用して迅速かつ大量に取得することができる。実際、台北で宿泊したホテルのロビーに設置されていた宿泊客用のPCで香港の音楽コンサート情報をネットで検索を試みた結果、香港中文大学が開設しているサイトに遭遇し、利用できたことは幸いかつ有益だった^{注3}。今回は香港到着後、そうした既得のインターネット情報の有用性を踏まえた上で、やはり主要な上演スポット（ホールなどの演奏会場やイベント広場など）に置かれているチラシの収集も音楽芸能事情を把握するための有効な手段であるという認識、およびそれぞれの会場の現状を知るという目的の下、久しぶりに各会場を巡回して見た。まず、筆者の香港長期滞在中からあった大会堂（シティホール）、芸術中心（芸術センター）だが、それらはともに健在で、今でも芸術祭ほか多くのイベント会場として重要な機能を果たしていることを確認した。1963年に設立された大会堂は香港島のフェリー乗り場に至近のロケーションで、対岸の香港文化中心（文化センター）ができるまでは、芸術祭やアジア芸術祭はもとより、伝統音楽から西洋クラシック音楽まで様々な催し物が行われる最初の代表的な上演スポットであった（写真1）。

それに次いで重要な機能を果たしていた芸術中心は香港島の湾仔地区に位置し、1977年の開設当初、利用可能な公共交通機関であるバスや路面電車の停留所からの距離が比較的遠く、急ぎの場合、タクシーを利用せざるを得ないというアクセス状況にやや難があったが、地下鉄（港島線）の開通（1985年）後、最寄りに駅が建設されて以来、大分改善されている。そして、以前、同センター内には設置されていなかったグッズ売り場の出現（写真2）にも目を引かれたが、1984年に開設され、芸術の高等教育機関であると同時に上演スポットの機能も果たしている演芸学院（パフォーミングアーツアカデミー）が隣接しているのは双方にとってメリットがあるものと推察される（写真3）。

1989年にオープンした香港文化中心は上記の大会堂や芸術中心に比して新しいだけに規模もより大きく、大ホール、シアターのほかにAVソフトなどを揃えたショップもあって付帯設備も充実している(写真4)。ヴィクトリア湾を挟んで、両岸にこのような文化施設(音楽ホール)が設置されていることは、香港の音楽文化の向上に大きな貢献を果たしているはずである。

次に、中国劇音楽の上演スポットとして古くからあったのが香港島の東寄りの北角地区に位置する新光戲院(サンビームシアター)である。そこでは大陸の著名な劇団、演奏団体の香港公演が以前から盛んに行われており、筆者もそれらの鑑賞のため何度となく訪れる機会があったが、その機能・用途(以前は映画も上演していた)は今も変わりがなくようである(写真5)。九龍サイドでは、普慶戲院が似たような役割を果たしていたことで知られていたが、筆者の最初の香港訪問当時すでに映画館としての機能を残すのみとなっていたようで、現在では閉館しその姿を消している(写真6)。近年、香港を代表する粵劇の専門上演劇場として復活した油麻地戲院と、そして劇場ではないが、粵劇を知る上で有益な知識や情報を得るスポットとして、新界の沙田地区に設立された粵劇文物館の存在が確認された。その双方とも筆者ははじめての訪問でともに興味深かったが、油麻地戲院についてはコンサート見聞の項で扱うこととし、ここでは香港文化博物館内の粵劇文物館について述べる。館内には舞台、脚本、衣装、楽器など粵劇に関するあらゆるものが展示されており(写真7、8、9)、付設のショップには粵劇関係の資料を中心として中国劇音楽のAV資料が豊富に揃っていて、限られた時間内に集中的に粵劇の知識を学習することができる。

そして上記以外の音楽芸能の情報収集スポットとしては、書店、CDショップ、国貨公司内のAV販売コーナーなどがあるが、それらについては資料収集の項で別途言及することとし、ここでは各種スポットで収集したチラシや目に留まったポスターから知り得た情報の中から以前には見られなかった例を紹介する。それは演芸学院の広報誌(と思われる)『学院通訊 2013.01』(pp.20-23)に記載されている同学院における2013年1月の催し物スケジュールで、中でも一際目を奪われたのが学内関係および学外者による演奏会の合間を縫うようにして組まれている修士学位取得に関わるレクチャーコンサートで、西洋クラシックから中国音楽まで内容的に多岐にわたっている。それらを読みやすさを考慮して専攻の中国楽器のみ漢字でその他は英文表記で下記に書き写して見る。

1月8日

4:00p.m. Academy Master of Music Lecture-Recital by Raymond Wong (Percussion)

5:00p.m. Academy Master of Music Lecture-Recital by Guo Zheng (Trombone)

1月9日

3:00p.m. Academy Master of Music Lecture-Recital by Ferrer Eric Iglesia (Voice)

4:00p.m. Academy Master of Music Lecture-Recital by Qiu Wenjie (Voice)

1月10日

2:00p.m. Academy Master of Music Lecture-Recital by Francesca Wong Shun (Voice)

3:00p.m. Academy Master of Music Lecture-Recital by Li Yang (Voice)

1月16日

2:00p.m. Academy Master of Music Lecture-Recital by Lau Nga-ting (阮)

3:00p.m. Academy Master of Music Lecture-Recital by Eric Wu Siu-hin (高胡)

4:00p.m. Academy Master of Music Lecture-Recital by Wu Chun-hei (嗩吶)

1月17日

11:00a.m. Academy Master of Music Lecture-Recital by Zhang Qianxia (Piano)

12:00p.m. Academy Master of Music Lecture-Recital by Zhang Baolong (Piano)

1月18日

11:00a.m. Academy Master of Music Lecture-Recital by Chen Ying (Cello)

12:00p.m. Academy Master of Music Lecture-Recital by Cynthia Tse Sin-wai (Violin)

それらは同学院内のコンサートホールまたはリサイタルホールで行われ、すべて入場無料で開始30分前に学校のチケット売り場で整理券を配布する形を取っている。残念ながら上記のレクチャーコンサートに出向く機会を逃したため、その演奏水準やレクチャーの内容など具体的な状況は分からないが、世界音楽は言うまでもなく、日本音楽の専攻科設置にも消極的な芸術大学が未だに存在し、旧態依然としか言いようのない日本の国公立高等芸術教育機関・組織とは対照的な状況が伺える。

このように、香港の音楽芸能関連イベントは多様化していることが伺えるが、それらのより踏み込んだ内容については後日、台北のチラシ収集状況とともに改めて論じることとして、ここでは実際に演奏は聴けなかったが、気になったイベント情報を二つ記しておく。一つは「青年舞台」と題されたダンスとバンド演奏で、日時・場所は1月19日、黄大仙廟宇広場 14:00-16:30、主催は香港青年協会西貢及黄大仙外展社会工作队、賛助は社会福利署地区青少年發展資助計画と記されている。上記の組織が如何なるものかさらに調べてみたいところで、今後は有料、無料ともに各種のイベントや演奏会の開催に対する諸条例について、香港における音楽芸能活動の統括管理状況を知る必要を感じた(写真10 開演前)。

もう一つは、過去に行われたイベントの写真展示に遭遇したことから知り得た情報で、中国の伝統風俗行事の廟会(縁日)についてである。写真11に撮影されている大角咀廟会(九龍サイドの大角咀地区の廟会)は2013年3月3日が第9回となっているので、近年、始められたものらしく、以前にはなかった興味深い現象である。筆者の前回の香港訪問以降と考えられるが、そうした動きがいかなる理由によるものか今後、調査を進めたい(写真11)。

2 音楽芸能公演見聞録

今回の香港滞在期間中、筆者が見聞の機会を得た音楽芸能ジャンルは伝統的な劇音楽の京劇や粵劇、新しい演奏形式である中国楽器の大型アンサンブル、広東語によるオリジナルミュージカルから映像と音楽のクロスオーバーアートのライブ、さらに路上パフォーマンスと多岐に渡った。以下、それらを見聞した時系列で記す。

2-1 ミュージカル「頂頭鎚(Field of Dreams-The Musical)」

1月15日、7:45p.m.～、香港文化中心の大劇院。香港話劇団による広東語のオリジナルミュージカルの再演である^{注4}。一席席V17、200香港ドル。一般公演日は1月12及15-19日の7:45～、13日及19-20日の2:45～、その他学生を対象とした公演として15日、21日の2:15p.m.が催さ

れている。

配布プログラムに掲載のストーリー（中国語および英語の双方を参照の上）をまとめると次のようになる。香港がイギリス植民地時代の1936年、小さな漁村のアマチュアサッカーチームのメンバー8人が中国（中華民国）のサッカーチームとの合同でベルリンオリンピックに出場することになる。そこからチームメンバーと関係者たちに香港のアイデンティティ、絆とは何かを考える数々の試練が訪れるというもの。全2幕で上演時間は2時間45分、間に15分の休憩。

次に一部の制作スタッフとその学歴を中心に記す。陳敢権（Anthony Chan）：コロラド州立大学演劇修士。作曲・編曲の高世章（Leon Ko）：ニューヨーク大学ミュージカル創作修士。作詞：岑偉宗（Chris Shum）広州生まれで5歳の時、香港に移住。香港バプティストカレッジ中国文学科文学学士、香港大学教育学院哲学修士。振付：楊雲濤（Yang Yuntao）中央民族大学舞蹈学科卒業。

主要キャストは香港話劇団のメンバーで構成されており、劉守正（鄭開滿）：演芸学院戲劇学院の卒業。王維（林家振）：国家二級俳優とこちらも様々な経歴の持ち主が揃っている（カッコ内は役名）。

本ミュージカルの歌詞に関しては、作詞家による解説文（プログラムのp.9）が参考になった。それによればそのスタイルは雅、妙、趣、俗、鄙の5タイプに分けられ、俗、鄙の二要素に広東語の特徴、すなわち音韻、リズムの面白さが生かされているという。実際に観劇した筆者にとっては、それは音楽（歌）の創作スタイルとの関連も含めて大変興味深い問題であると感じた。

本劇の扱う内容の歴史的背景から、反日、反英、反大陸を標榜するような、そして香港のアイデンティティの模索、さらには香港独立の夢を表象するような歌曲が、ストーリーの展開に沿って次々と歌われた。例えば、立ち退きを迫れた漁民たちが歌う「去你的英皇道（クソックらえ、King's Road）」では聴衆から拍手が湧き起こった。

音楽スタイルは、大まかに言ってブロードウェイのそれを基礎にしていると感じたが、広東口語および広東方言（方言の発音）による標準中国語の文体による歌詞を上手く融合させており、中国（広東）伝統の語り物のリズムや、日本のいわゆるヨナ抜き音階による楽曲「さんざか」やヒップホップなど多様な要素が含まれていた。大陸その他の影響で揺れ動く香港人の団結と心境を広東語の俗語を上手く溶け込ませた歌詞と音楽で表現した優れた作品だと感じた（写真12）。

2-2 京劇「蝶海情僧」

1月16日、7:30～、新光戲院、チケット280香港ドル、一階L20。北京京劇院・梅蘭芳京劇団京劇と香港の盛世天戲劇団による合同公演。配布プログラム冊子からストーリーを以下に記す。

「唐代末、読経すると蝶を呼び寄せる超能力を持つ皇太子の真如と、大臣の息女で幼少より魅力的だった香凝の2人は幼馴染であり、互いに惹かれあっていた。宮廷の政変後、真如は僧に身をやつして荒れ果てた被災地の救済へと向かうが、香凝は真如を忘れ難い思いを抱きつつ、新しい皇太子の妻となる。歳月が経ち、春となり蝶が舞う季節となって、昔馴染みの友も共に白髪交じりとなった時、愛する2人は再会するのであった。」

演目タイトルの大意は「多くの蝶々の気持ちを持つ僧侶」といったところだろうか。キャスト、製作スタッフは下記の通り。真如：李宏図、葉派の小生（若い男役）で、北京京劇院の看板俳優の

一人。香凝：郭瑋は程派の青衣（若い女性役）。相国：朱強、著名な馬派の老生（中年の立ち役）。劉公濟：陳俊傑、有名な裘派の花臉（敵役）で、北京京劇院の看板俳優の一人ほか。鼓師（打楽器グループのリーダー）は封千、琴師（主要伴奏楽器の京胡奏者）は趙旭、プロデューサー兼オリジナル脚本作者は李居明（香港）、そして舞台監督は陳薪伊が務めている。

公演の方だが、オープニングからして通常の京劇公演とは全く異なる様相で、京劇以外で用いる中国楽器合奏の伴奏で奇妙な民族舞踊とナイトクラブを思わせる不思議な歌がまず披露されて、その数分後、いわゆる京劇の鑼鼓が鳴って本編へと入っていった。主要キャストの喉は悪くないのだが、フシに手を入れすぎで、特に段落を示す聴きどころのフレーズが複雑となり、伝統的な京劇を聞きなれた筆者には不快に感じるものであった。例えば、僧の身となった真如は、青年役が悲しい曲調である反二黄慢板のフシを歌うことは非常に珍しく、その用法はそれなりに面白い試みと思ったが、ここでもフシに手を入れ過ぎている。その他、本来は2拍子で歌われる活発で喜び溢れる曲調である「十三咳」というフシ（京劇「大登殿」のフィナーレで歌われる有名なもの）を3拍子で歌うなど常軌を逸した作風を改革と呼ぶことには賛同できない。劇中に挿入された崑曲のフシや鑼鼓は伝統的なものをベースにしていたが、伴奏楽団をオーケストラボックスに配置し、しかもそこには指揮者が居り、中国楽器アンサンブルセクションと京劇伴奏楽団の双方に指示を与えていたのは奇妙な光景であった。配布プログラムの解説によって、本演目、もともとは粵劇の演目（新光戲院の会長を務める劇作家でもある李居明の作）で、その京劇ヴァージョンとして上演したものであることが分かったが、とにかくフシつけは各派の歌唱スタイルを切り張りし、羅列した酷い出来で、鑑賞に堪えず前半で退場した。

この新光戲院には劇音楽関係のDVDショップがあり（筆者の香港長期滞在当時はまだ無かった）、前回、前々回の香港滞在中に立ち寄った記憶がある。確かに品揃えは豊富で、必要以上にまわりついてくる店員をうまくあしらえば良い映像資料を入手することができるはずである。

2-3 無声映画「西廂記」鑑賞会

1月17日、1:00～1:50p.m.、香港アートセンター内のagnes b.CINEMA。入場無料。自由席。

「旧経典、新音楽（Classical Film with a New Score）」という副題から察するに、無声映画と陳銘志作曲、香港創楽団による生演奏とのクロスオーバーアートイベントと考えて良いだろう。同映画は同名の古典劇を元に1927年に制作された中国映画黎明期の作品である。1928年にヨーロッパ各地での放映はまずパリから始まり、翌年、ロンドンでも上映、好評を博したという。この日の鑑賞会は、制作当時のままとと思われるフランス語字幕付きでの上映であった。

作曲者の陳銘志は香港演芸学院で作曲・電子音楽を専攻、卒業後、東京芸大大学院で修士、エリザベト音楽大学および上海音楽学院の博士後期課程を経て、現在、ポストドクター、上海音楽学院の教授として香港を代表する作曲家の1人である。当日のアンサンブルの編成は指揮：Vicky Shin（洗宏基）、クラリネット：Eric Man（文冠中）、バスーン：Leung Tak wing（梁德穎）、ホルン：Zach Glavan、ハープ：Amy Tam（譚懷理）、ヴィオラ：William Lane（凌芸廉）、チェロ：Rosie Mills-Gon、パー

カッション：Heidi Law（羅鎧欣）で、香港創楽団（Hong Kong New Music Ensemble）のメンバーである。

本イベントはチラシに明記されているように「培育芸術養分、越界芸術体験 Crossover Experience in Arts」「午間芸萃 Art@Lunch」の一環で、チラシおよび配布プログラムの説明文から同シリーズの主旨とプログラム予定を以下のようにまとめることができる。

香港アートセンターが開催する「Art@Lunch」シリーズプログラムは毎月第三木曜日に行われその主旨は地域貢献、文化交流、アートの多様化の促進である。香港創楽団、互文教社、浪人劇場といったそれぞれに異なるジャンルの三団体と連携して、ランチタイム（筆者注：香港では 1:00-2:00p.m.）に様々なジャンルやスタイルのパフォーマンスを提供する。2月～11月の予定の中には、オカリナとパントマイムのパフォーマンス（3月14日）、旧と新：リゲティとブラームス（4月18日）、ジャズのビッグバンドとダンス（5月16日）、ブラジルのカポエラ（9月19日）、シタール、二胡、ギターと弦楽四重奏（11月21日）など、なかなか興味深いプログラムが組まれている。また、イベント進行中、司会者が西洋人の観客の来場に配慮して英語でもアナウンスを行った光景は、中国返還後の香港が筆者の滞在中と変わっていないことに一種の安堵感を覚えた。配布プログラムの書式も中・英併記となっている点も同様で、懐かしさとともに日本の後進性を改めて思い知らされた。

2-4 粵劇「蝶影紅梨記」

1月17日、19:30～、油麻地戲院。香港八和会館・油麻地戲院共同プロジェクト2012-2013の一環として行われた新人シリーズ公演（粵劇新秀演出系列）。チケット100香港ドル（1階席H16）。

劇場の音響は良好で、歌唱の主要伴奏楽器の高胡（高音二胡）の響きがよく映える。この楽器は新様式の中国器楽アンサンブルに使用するよりは、やはり伝統的な劇音楽伴奏の方が味わい深いと再認識した。筆者にとって香港を代表する音楽のイメージとして最も相応しい、この懐かしい鑼鼓の音量も大きすぎずよくコントロールされており、歌唱では劇中何度か登場した粵劇ならではの旋法「乙反調」（低から高へ階名で記すとソシドレファソでシが低め、ファは高めの音高）を用いたメロディが印象深かった。京劇公演の場合と同様に観客の年齢層は全体に高い（七、八割が高齢層）という印象だが、筆者の左隣の席には母親と息子（二十代と思しき）の二人連れが座っており、また、京劇公演と異なり歌詞やセリフの字幕テロップは無い（實際上、必要がない）という状況は、香港育ちの代表的な伝統芸能として広く認知されている証左（粵劇はユネスコ世界文化遺産に指定されている）であり、同プロジェクトの主旨である香港文化のアイデンティティを求める動きと合致すると感じられた（写真13）。

2-5 香港中楽団コンサート「名家名曲賀新春」

1月19日、8:00p.m.～、香港大会堂。チケットは150香港ドル、二階席BJ20。演奏曲目は2日間共通で前半は〈將軍令〉〈沂蒙山歌〉〈平湖秋月〉〈鳥投林〉〈幽蘭逢春〉、後半は〈長城隨想〉〈步步高〉

〈娯楽昇平〉と、いずれも中国楽器による新様式のアンサンブルのスタンダードレパートリーである。演奏者（カッコ内は担当、演奏楽器）は閻恵昌（指揮）、黄丹鴻（高胡）、宋飛（二胡、椰胡）、王次恆（笛子）と大陸の著名音楽家がずらりと顔を揃えていた。

配布のプログラム冊子には同楽団の歴史と概要をコンパクトにまとめた記事も掲載されていた。それは今回特別の掲載なのか、定例なのかは分からないが、同楽団の演奏を初めて鑑賞する聴衆には言うまでもなく、ある程度の馴染みのある筆者にとっても近年の状況を知ることができたという意味で有益であった。同楽団の当夜の演奏に関しては、筆者が香港在住時に見聞した当時より、技術的にずっと上手くなっていることは確かなのだが、率直に言って音楽自体にまったく面白味が感じられなかったため前半で退席した。

現在の同楽団のメンバー構成は、大半が大陸の音楽家で占められた感が否めず（ただ、思えば成立当初から似たような状況だったのだが）、大陸の音楽家が香港の音楽界へ大量に進出することによって、文化の領域における「中国（大陸）化」が大幅に進行し、それは大陸による香港統治の浸透を象徴しているように思えた。同楽団の演奏を十分に享受するには至らなかったが、最近の様子の一端に触れたことは様々な問題を考える上で1つの機会となったことは確かで、従来、胡琴類の楽器が使用していた蛇皮に環境保護の観点から化学的素材を代用し制作された改良楽器（写真 14 二胡）が用いられているとプログラムで紹介されていたこともその一例である。そして、前記のように筆者が何故、同楽団の演奏に興味を感じなかったかという疑問は、台湾の音楽芸能雑誌『表演芸術 241 号』（2013 年 1 月）に掲載された同楽団の台湾公演のレビュー（pp.105-110）における「化学的素材の導入・使用による胡琴類の各楽器の音色の均質化」という指摘を読むと、その一部が解けたような気がした。

2-6 ストリートライブ見学

このジャンルは二つ見る機会があった。一つは 1 月 19 日の夕刻、芸術中心の入り口前での大学生風の若者たちによるもので、もう一つは 1 月 20 日の 17:15 頃から見学したもので、後者はフェイスブックを通して開催直前に告知がなされ、観塘地区の海濱道公園の幹線道路下で催されたいわゆるゲリラライブである。

前者は（写真 15）音楽的にはさほど面白味を感じるものではなかったが、こうして若者が集まって路上で音楽演奏を行うという現象自体、香港では以前あまり見かけられなかった点で印象に残った。後者は「ライブ」という検索語で香港のホテルの部屋でネットを検索していた時に、たまたま情報を入手したもので、タイトルを「九龍東反公権力規劃‘音楽会’」（九龍東部の反公権が企画する「音楽会」）と称していた（写真 16）。筆者が香港のインディーズミュージシャンやライブハウスに興味を抱くキッカケとなったのは、東京渋谷の映画館アップリンクで催されたイベント「香港でライブハウスを運営すること Hidden Agenda ドキュメンタリー上演＋交流会」に参加したことである^{注5}。そうした経緯もあって、ゲリラライブに先立つ 1 月 17 日、旺角にあるインディーズレーベルを専門に扱っている ZOO レコードを訪ね、そこの店員（店舗は非常に狭く、店員は一名しかいなかった）

と歓談した際に、その話題を出してみたところ、彼の話しぶりからは、やはり筆者の思った通りアジェンダは香港のライブハウスの中でも、そのような映画を製作できるだけ有力なコネと資金力を持っているものと推測された。上記の映画は、ライブハウス「アジェンダ」は工場の一室をライブハウスとして使用しており、それが香港では不法行為と見なされるため、政府、警察からの圧力の下、立ち退きを迫られている厳しい現実を報じているという内容だが、映画などメディアで紹介された情報を即、無批判に受け入れる日本の楽観的悪弊がまたしても露呈してしまった気がする。

3 収集資料について

インターネットによる情報検索という手段が定着した現在、音楽芸能に限らずどの分野においても、研究状況をより広く、速く掌握すると言う点では、旧来の紙媒体による文献資料の重要性は後退したものの、その収集が必要であることに変わりはなく、現地へのフィールドワークを実施する場合でも、文献収集という作業を怠ることはできない。今回の香港訪問でも商務印書館、三聯書店、中華書局など主要書店を見て回ったが、以前に比べると中国音楽に関する書籍の品揃えが減少しており、むしろ、そうした香港の老舗より新興の台湾資本の誠品書店（香港支店）の方が充実していることに時代の変化を感じた。香港にも台北のような（中国）音楽専門書店ができたのだろうか？

この点については今後も調査を継続する必要があるだろう。

AV 資料については、近年は HUGO などの新しいレーベルが幅を利かせていることは把握していたが、芸声レコード、百利レコードといった中国の伝統音楽を多く取り扱っていた往時の主要なレーベルの店舗の所在を確認する時間がなく残念だった。書店における音楽書籍、AV 資料の扱いの退潮と反比例するかのように、上記のホールなどの付属設備（各種グッズ売り場など）で扱われている音楽関連の諸資料が充実している状況は注目に値する。特にホールなど文化関係のスポットの売店や国貨公司における AV 資料は以前より揃っていたため、香港では文献より AV 資料を多く入手する結果となった。

下記に記した購入済の資料は、台北での購入資料と同様、筆者の視点、近年の関心事を反映して厳選したもので、その中身の詳細については、台北、香港で入手したものを後日まとめて論じたいと考える。

【中国音楽関係 AV 資料】

〔劇音楽〕『龍鳳争掛帥』新天地娛樂發行有限公司、SD2048-N、出版年代不明、『帝女花』新天地娛樂發行有限公司、WDV 8001N、出版年代不明、『京劇 穆桂英掛帥』齊魯電子音像出版社、MPEG-2、出版年代不明、『京劇 白馬坡』中国唱片上海公司、HVCD-0273、出版年代不明

〔伝統器楽〕『潮州弦詩（一）黄徳文專輯』広東音像出版社、GYD-2606、出版年代不明、『潮樂大典 2』広東音像出版社、GYD-2662、出版年代不明

〔新しい中国器楽〕『世紀中樂名曲頒獎音樂会』現代音像有限公司、HKCO-DVD-8-2003-10、出版年代不明

〔中国近代音楽〕『長恨歌及林聲翕声楽作品精選』HRP7224-2、HUGO、2001 年

〔香港流行音楽（インディーズ）〕『my little airport 香港是個大商場』hrcd014、維港唱片、2011 年

中国音楽関係の文字資料は結局、『粵劇曲芸月刊第 200 期』（鄧氏兄弟資料研究出版公司、2012 年 12 月）と胡恩威編『文化視野 01』進念・二十面体 E+E（2012 年 9 月）の 2 点だけを購入した。

それから中国音楽以外の文化ジャンルを扱うもの、特に現代の日本文化を香港の研究者がどのように捉えているかを知る手がかりとなりそうな文献として、李培徳編『日本文化在香港』（香港大学出版社、2006年）、湯禎兆『日本進化 流行文化解毒』（生活書房、2012年5月）の2点を購入した。また、今回の香港訪問で楽しみにしていた香港の若手文化研究者、羅展鳳さん（香港公開大学講師で映画音楽が専門）とその友人の張志偉博士（香港浸会大学准教授でカルチュラルスタディーズが専門）との歓談は1時間ほどだったが、香港の音楽芸能、文化全般に関して新しい情報を得るという点で、啓発されるところが多かった。前記の広東語ミュージカルの上演は、1つには広東語が教育現場から押し出されようとしている状況と合わせて考えると新たな視座が見えてくるなどの指摘を受け、香港の若い文化研究者が日本をはじめ世界の現代文化にどのように接しているか、その現状の一端に触れることができたのは有意義だった。羅さんから贈呈された著書、羅展鳳『電影×音楽』（三聯書店、2011年11月）、羅展鳳『流動的光影声色』（広西師範大学出版社、2007年11月）からも新しい知識や視点を学ぶことで、筆者の視野を拡大させる必要性を痛感した。

4 その他

その他の情報では、2012年香港音楽十大ニュース（「十大楽聞、Music Headlines」）投票を呼びかける宣伝チラシが筆者の目に留まった。予めノミネートされた21の項目が書かれたチラシで、以前はそうした報道は筆者の記憶に無く、実際、いつ頃から始まったのか定かではないが、同地の音楽事情の一端を知る上で興味深いと思われた。これに関しては、選出結果を入手後、改めて紹介したいと考える。

結語

以上の考察の結果、下記の点が明らかになった。香港に対して行政的に中国支配が定着し、文化にもその影響が色濃く反映し始めている現在、香港人はそれにどう対処しようとしているのか、適応への配慮、苦慮、アイデンティティを模索する苦悩など様々な側面を垣間見ることができた。そして、香港のアイデンティティ認識を巡っては、香港における大陸寄りの勢力の存在、台湾や日本に対する様々な姿勢、欧米等諸外国への留学経験を持ついわゆるエリート層の立場など、その状況は音楽芸能の在り方同様、多様かつ複雑であることが伺えた。

ところが、香港の音楽芸能に関してネットを中心にいわゆる香港フリークがアップしている諸情報や、文化研究を専門としていない者たちによる無責任な言動や記事が、日本の旅行ガイドブックや香港の音楽を扱った出版物に氾濫している状況は、日本のメディアの水準の低さを如実に物語っていると言わざるを得ない。そして、それよりもさらに深刻なのは、それらが無批判に採用する民族音楽学者、ポピュラー音楽研究者が存在することで、そこからは香港の音楽芸能の本質に迫ろうという姿勢、香港の音楽文化を正面から見据えようとする動きが、筆者には一向に感じられない^{注6}。この点については台湾の場合と同様、香港についても『TIMEOUT』などの英文旅行書のほうが、日本の出版物より明らかに有用であることを再認識した。今後は、筆者が以前に拙著『中国音楽の現在』

で指摘したように入場無料の各種の音楽芸能イベントを含めて、ジャンルも網羅的に香港の音楽文化を総体的にとらえる視点が必要だと考える。

台北の地下鉄駅の構内で偶然目にした LUNA SEA のコンサートの情報を香港ではチラシ（彼らの香港ツアー開催日は 2013 年 2 月 2 日）を取得し、台湾香港における J-Pop の普及、浸透をこの目で確認した。日本における香港の音楽芸能に関する報道のみならず、日本の音楽家、団体のアジアでの活動、活躍に冷淡な日本のマスコミの関心度、理解度の低さは今に始まったことではないが、それよりも筆者には同地の音楽芸能に関する日本の音楽関係諸学界（学会）の香港認識に、メディア以上に後進性、偏狭性が感じられることが看過しがたい。

注

注 1 拙稿「都市の音楽芸能をフィールドワークする～台北音楽紀行」『広島大学大学院教育学研究科 音楽文化教育学研究紀要』XXV、pp.21-28、2013 年 3 月 22 日）

注 2 香港中文大学崇基学院中国音楽資料館にて京劇録音資料の整理および報告書の作成に従事し、その後、聯合音楽院にて二胡を習得した。

注 3 出国前にも情報収集に努めていたが、台北や香港でのネット検索の方がさすがに量質ともに優れていた。

注 4 広東語によるオリジナルミュージカルは張学友主演の「雪狼湖」で、それについては拙稿「音楽」『中国年鑑 1998』を参照されたい。

注 5 同イベントのサイトアドレス→ <http://www.uplink.co.jp/event/2012/3384>

注 6 『ニューグローヴ世界音楽大事典』の「香港」の執筆者は同地域を専門とする音楽研究者ではないにしても「芸術祭がアジア芸術祭と改称された」という記述は誤りであると指摘されねばならない。井上貴子編『アジアのポピュラー音楽』に所収の香港ポップスに関する記事に象徴されているように、中国語あるいは広東語を解さないばかりでなく、音楽研究者とも思われない執筆者によるディレクタントレベルのものが些か成りとも学術性を帯びた出版物に登場することには疑問を抱く。

参考文献

「香港」『ニューグローヴ世界音楽大事典』（講談社、1993 年）

拙著『中国音楽の現在 伝統音楽から流行音楽まで』（東京書籍、1994 年）

拙著「音楽」中国研究所編『中国年鑑』（新評論、1998 年）

井上貴子編『アジアのポピュラー音楽 グローバルとローカルの相克』（勁草書房、2011 年）

『表演芸術 241 号』（国立中正文化中心、2013 年 1 月）

＊各種プログラム冊子とチラシ類は省略。

写真 1



写真 2



写真 3



写真 4



写真 5



写真 6



写真 7



写真 8



写真 9



写真 10



写真 11



写真 12



写真 13



写真 14



写真 15



写真 16



